

## サムエル記上9章27節〜10章1節、6〜7節、ヨハネ福音書12章1〜12節

ヨハネ福音書では、12章から21章までが、イエスの最期の1週間の出来事を描いています。過越祭の6日前にベタニアの村に来られたイエスは、ここでマリアから高価なナルドの香油を足に塗ってもらったのです。そして、その翌日、最後のエルサレム入場をされて、13章から始まる受難物語へと続いていくのです。物語としてはイエスが十字架への最後の旅立ちをする場面ですから、状況はピリピリしているところだと思います。そのような張り詰めた空気感の中で、一切の打算がない一人の女性の奉仕があったことを12章1〜3節は端的に描いています。その女性とは、兄弟であるラザロを生き返らせてくれたことを感謝して仕えているマリアでした。

ベタニアは、エルサレムから3キロ程度と近い距離にある村です。イエスはヨハネ福音書ですでに何度かエルサレムに来ています。共観福音書ではイエスが最後の十字架にかけられる時にエルサレム神殿に入場するのですが、ヨハネ福音書では5回ほどエルサレムに行っています。エルサレムに来るときは、このベタニアで近しい者の家に滞在していたようです。

マタイ福音書(26章6〜7節)によれば、この家が重い皮膚病を患っていたシモンの家であったようです。ベタニアという地名は、「貧しい者の家」という意味で、重い皮膚病を患っていた人々が一般社会と関わりを持たないように隔離された村だったかもしれません。いずれにせよ、そのシモンの家には夕食の用意がされていて、イエスによって甦らされたラザロもその食事の席についていたのです。ラザロの姉妹であるマルタが食事の用意のために給仕をしていたとあります。そのような時に、ラザロのもう一人の姉妹であるマリアが純粹で非常に高価なナルドの香油を1リラ持つてきて、イエスの足に塗り、自分の髪の毛でその足をぬぐって1たのでした。当然、家中に香油の匂いが充満したので、誰もが知ることとなり、弟子であるイスカリオテのユダが、この香油を買うために300デナリオンも使ったのならば、そのお金で貧しい人々に施すことができましたのに、と不満を口にしたのです。このようなユダの意見がどうしてたのかについての説明は、イエスの弟子グループの会計を担当していたユダがその会計の中身を誤魔化していたからだという説明文が記されていますが、歴史的にみてその真偽は不明です。人間的には金銭でのごまかしが裏切りを誘発したと解釈するのが一番納得しやすいからです。

マリアがイエスの足に高価な香油を塗ったという所作そのものが、イエスを救い主として受け入れたことを象徴的に表しています。救い主を意味するキリストという言葉はヘブライ語ではメシアで、このメシアとは「油注がれた者」という意味です。ですから、マリアがここで香油をイエスに塗った行為は、イエスのことをメシアとして認識したので、香油を塗ったことを表しているのです。古代イスラエルでは、預言者や王が就任する際には、祭司によって油を塗る行為がなされてきました。この伝統がマリアの香油塗りの行為には現れているのです。もう一つの可能性としては、イエスが十字架にかけられて死ぬわけですが、その遺体に香油が塗られ、没薬とアロエを混ぜたもの、香料と一緒に亜麻布(あまぬの)で包む処置をしたので、イエスの十字架刑死を先取りして、遺体に香油を塗る行為を先駆けて行ったとも解釈できるわけです。

本日のヨハネ福音書12章でのマルタとマリアの行動は対照的です。マルタは相変わらず、接客に集中しています。一方のマリアは、ルカ福音書(10章38〜42節)でも、そうですが、給仕などせずに、イエスの話を主の足元に座って聞いているだけです。本日のテキストでも、イエスの足に香油を塗って、自らの髪の毛で拭いています。イエスにだけ集中しているのです。

この対照的な姿勢を見て、マリアの行動姿勢を高く評価する論説もありますが、私はどちらか一方が価

値ある態度だとは考えない方が良いと思います。

いふなれば、マルタのように全体の状況を勘案して、その時何をする必要があるのかを判断して給仕をすることも大切ですし、マリアのように、他のすべてのことに惑わされることなく、イエスの言葉を聞くこと、イエスの立ち居振る舞いに心を向けて、今自分が何をすべきなのかを考えて行動することも大切であるわけです。

つまり、私たちの信仰生活の日常においては、生きていく上での日常生活での必要なことをなおざりにすることなく、一方では、イエスの教えにどのように従っていくかを考えることも必要なことなのです。マルタ的な気遣いが日常生活を支えていることは確かですし、しかし、一方で、イエスの生きざまに照らして自分がどのように生きていくべきなのかを、その時々立ち止まりながら、吟味していくことも大切なことなのです。

さて、ここまで考えてきたのですが、どうもしつくりきません。日常生活の必要なことをなおざりにすることなく、一方ではイエスの教えにどのように従っていくかを同時並行で考えていくということ、このナルドの香油の出来事を理解してよいものかどうかを考えてみました。先日 of 全体祈祷会で多田瑞枝さんが紹介してくださった若松英輔さん監修の志樹逸馬さんの詩を一部読んでみたのですが、ハンセン病の方々が戦後の日本でつい最近まで隔離政策で長く誤解を受けてきたことを思い起こし、改めて、このナルドの香油物語をその観点から考察してみる必要があることに気づかされました。このナルドの香油の出来事が起こった場所が重い皮膚病を患っていたシモンという人物の家であった蓋然性が高いことを踏まえて考察しなければならぬのではないかと考え、若松英輔さんが書かれた「霊性の哲学」という本の中で紹介されている(こだま)雄二さんの詩を改めて読んでみました。「ここに生きる」という題の詩です。

2

「部屋の柱にかけられた鏡に今朝ふと眼をやって／そこに写し出された私の顔に気づく／ずいぶん久しぶりの顔だったが／10歳代で髪が全部抜け落ちた頭に／老いていつそう窪み深めた眼窩(がんか)の一つは義眼／つぶれた鼻そして歪んだ唇から垂れる涎／ハンセン病後遺症を刻んだ相変わらずの私の顔だが／目の当たりにするとやはりギョツとする／だがしかしこの顔に／時に滴る汗には父から受け継いだ匂いがし／一つだけの瞳には同病の母の最後が妬きついている／両親の慈愛と悲哀とが交々(こもこも)こもるこの顔」

「同病の母」と言っているように、彼の母親も同じ病を生きて、それを彼も受け継ぐように病身になったのですが、この詩には両親に対する恨み心がありません。逆に、両親から注がれた尽きることのない情愛をみています。若松さんも書いているんですが、餌には、そういう顔だから生きるのが嫌になったというのではなく、こういう顔だったから、苦しみがあるから、悲しみがあるから生きてこられたという信念みたいなものがあることが、この詩から伝わってきます。私たちの日常でも、人生の試練の出来事に遭遇したからこそ、生きていける。そういう世界があることに気づかされます。

イエスがそういう人間の苦しみや悲しみを背負いながら、生きている人たちが住むシモンの家に招かれて夕食の席についていた時に、マリアがナルドの香油を旅で疲れたイエスの足に塗るといふ行為をしたのです。このように考えてみると、マリアは単に兄弟ラザロを生き返らせてくれたイエスに感謝の思いから香油を塗ったのではなく、現在で言えばハンセン病の患者が追い込まれたベタニアという村のシモンの家で、人間の苦しみと悲しみを抱えた人々と共にいのちを分かちあうように食事をしようとするイエスの足に高価な香油を塗りたくなったマリアの心情を何の不思議もなく肯定できるのです。苦しみと悲しみがあるからこそ、生きていく力を表している人々と共に歩まれるイエスがそこにいたからです。